



【小特集「第三の新人」再考：「戦中派」の思想と作品】女学生と戦争：津村節子・田辺聖子・河野多恵子の〈軍国の女学生〉小説

中村，ともえ

(Citation)

國文論叢, 62:117-132

(Issue Date)

2025-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100498120>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100498120>



■小特集 「第三の新人」再考——「戦中派」の思想と作品

女学生と戦争

——津村節子・田辺聖子・河野多恵子の〈軍国の女学生〉小説——

中村 ともえ

はじめに——郷静子『れいくえむ』

「あの太平洋戦争のさなかには、少くとも数百万の軍国少女——戦争を外在的ではなく、自己の内ものとしてとらえ、積極的にそれに参加し、その正義と美とを信じて身も心も捧げた乙女が存在したはずだということを考えると、この「れいくえむ」が発表されるまでの、わがくにの、軍国少女を主人公とした小説の永い間の欠落は、まことに不思議に思えます¹⁾」。

ここで「軍国少女を主人公とした小説」の嚆矢とされている『れいくえむ』は、一九七二年一月号の「文学界」に発表され、七三年に芥川賞を受賞した、郷静子の中篇小説である。主人公は数え年十七歳、神奈川にある仏教系の私立の高等女学校の女学生で、敗戦の数日後の現在から、戦時下の日々が回想される。

七五年刊の文庫の宮原昭夫による解説は、本作が発表されるまでこうした小説が長い間不在だったとしている。作者の郷静子は二九年生まれで鶴見高等女学校卒、主人公の年齢と学歴は作者自身のそれと一致する。後述の通り、実際には本作以前にも、同世

代で同じく高等女学校卒の田辺聖子（二八年生まれ、淀之水高女卒）や河野多恵子（二六年生まれ、大阪府立市岡高女卒）にこの条件に当てはまる小説があるにはあるのだが、なるほどそれらは目につきにくかったかもしれない。

奥野健男が六五年刊の『昭和戦争文学全集11 戦時下のハイティーン』の解説で、「大正十二、三年（一九二三、四）年頃から、昭和六、七年（一九三一、二）年頃までに生まれた小説家たち」による「戦時下のハイティーンの体験を描いた小説」が「戦後すぐには書かれず、五年、十年、二十年たってから書かれはじめた」ということは興味深い」と述べるのも、同様の印象によるだろう。二六年生まれの奥野はその要因について、戦争と敗戦の体験によって破壊された「ぼくの世代」は主体の再建に時間が必要だったのだと、戦前に自己形成を果たした第一次戦後派との比較において説明している²⁾。

戦時下に青春期を過ぎたこの世代は、一般に「戦中派」と呼ばれる。この世代の自己形成に関わる共通の体験として、勤労動員等による中・高等教育の量や質の乏しさを挙げることができると

戦時下のハイティーンの体験は、文学史の分類では「第三の新人」と呼ばれる作家たちによって、たとえば安岡章太郎（二〇年生まれ）の芥川賞受賞作『悪い仲間』（「群像」五三・六）や吉行淳之介（二四年生まれ）の連作『焰の中』（五六・一二、新潮社）などで、出征前の学生生活、軍隊生活、空襲体験などが小説化されてきた。ただし、進学によって男女の学校は分かれ、男性は兵役へ、女性は銃後に配置されるため、これらの小説で書かれる学校には（もちろん軍隊にも）女性はいない。

本稿では、高等女学校出身の三人の作家、津村節子（二八年生まれ、東京府立第五高女卒）・田辺聖子・河野多恵子の、戦時下の女学生を題材にする小説を取り上げ、それら（軍国の女学生）小説を戦時下のハイティーンの体験を描く小説の女性版として、「第三の新人」のそれと対をなすものとして位置付ける。彼女たちは「第三の新人」の作家たちより厳密には少し年下であるし、デビューの時期、交友関係、作風などから言っても、「第三の新人」にくくられることはない。⁽³⁾しかし、たとえば〈軍国の女学生〉小説が挙げて言及する昭和十八年の学制改革による高等女学校の繰り上げ卒業は、戦中に大学に進学した「第三の新人」の一部が経験した学徒出陣や繰り上げ卒業に、当時の高学歴層の修学の途絶という意味で対応するだろう（当時の標準的な修学と結婚の男女の年齢差を考えると、厳密に同じ年齢でないほうが対応するのかもしれない）。彼女たちより少し年下の女性の戦争体験は、国民学校の少国民教育や学童疎開という形で、逆に少し年上の女性は、出征する男性とのはい結婚や戦争未亡人といった題材として、体験を共有する男性作家や当事者以外の手によってはやくから小説に描か

れてきた。対して〈軍国の女学生〉小説は、体験の言語化としても題材としても遅れて登場し、そのため文学史において見落とされてきたと考えられる。

すなわち〈軍国の女学生〉小説は、作品自体を分析するだけでなく、発表された時期や媒体、各作家の中でのタイミングもあわせて検証する必要がある。評者の世代も手がかりになるだろう。たとえば『れいくえむ』の芥川賞選評で、安岡章太郎は「戦争という共通体験のせい」か「他には見られない感動があった」、「ここには私自身の戦後文学の出発点に触れてくるものがあると同時に、戦後三十年をへて濾過され、それなりに結晶しはじめた何かを感じられる」、吉行淳之介は「私とほぼ同世代の体験であり、戦争にたいする見方も納得できて、親愛感をもったが、私自身の体験や想像を上まわる部分が「…」ないのが物足らなかつた」と、自らの体験や世代に言及している。作品への評価とは別に、九人の選考委員の中で自分の体験に照らしてコメントするのは「第三の新人」の二人だけである。⁽⁴⁾

以下、本稿では六〇年代半ばに相次いで芥川賞を受賞し、長年にわたって活躍した「戦中派」世代の女性作家たち、津村節子・田辺聖子・河野多恵子の、それぞれの〈軍国の女学生〉小説の分析と検証を行う。

一 津村節子『茜色の戦記』——「私たち」女学生の戦争

津村節子は六〇年代半ば、『さい果て』（「新潮」六四・一二）で芥川賞候補、『玩具』（「文学界」六五・五）で芥川賞を受賞し、本格的な作家活動を開始した。その津村が戦争体験を小説化したの

は九〇年代初めと遅く、自伝的な長篇小説『茜色の戦記』（「新潮」九二・一一）においてである。本作は昭和十八年から敗戦の数ヶ月後までを範囲とし、続く年月は『星祭りの町』（「新潮」九五・九）・『瑠璃色の石』（同九九・一〇）で書き継がれ、三部作に結実した。

住んでいた土地が決戦場になったわけでも原爆を経験したわけでもないから、という理由で「これまで戦争体験を書かなかった」、「なかなか筆がおろせなかつた」作者が本作を書くに至ったのは、「戊辰戦争に巻き込まれた一少女を主人公」にした歴史小説『流星雨』（「世界」八八・六〇・八九・一一）がきっかけだという（「あとがき」『茜色の戦記』九三・四、新潮社）。戊辰戦争と太平洋戦争は類似点が多いというのだが、時代も性格も異なる戦争がそれぞれで似ているのではなく、「一少女」の体験である点で作者の中で重なったのだろう。以下、『茜色の戦記』がどのような意味で少女の戦争の記録であるのか、月経の挿話に着目して考察する。

なお、一連の〈軍国の女学生〉小説にはいくつか共通のモチーフが見られるが、月経はその一つである。『れいくえむ』でも、主人公が空襲の直後に母と女手で穴を掘って風呂を作る場面で、「急に声を落した。節ちゃん、今月のお客さんは。ちよつと前に済んだわ。それはよかつたね。母さんはもうじき、もうそろそろ御用納めだと思っただけだ。こんなとき、女は本当に困るねえ。母と娘は互に顔を見合わせて、仕方ない笑いを交した」と、戦時下の女性の共通の不自由として月経が話題にされていた。

『茜色の戦記』は全三章からなる。第一章は昭和十八年、主人公は東京の府立高等女学校の三年生である。戦争が泥沼に踏み込む

中、わずかに明るいうち学校生活の思い出となった出来事、たとえば仲良しの同級生の祥子と靖子と学校の問題児の上級生・曉世とでオルコットの「四姉妹」を演じたことなどが叙述される（同じ作品は後述の田辺聖子『私の大阪八景』で主人公の女学生が読む本として登場する）。第二章は昭和十九年、四年生の主人公は北辰電機に動員されることになる。第三章で主人公は女学校を繰り上げ卒業し、中島飛行機工場に動員されていた上級生の史織とともに卒業を祝う。本作のクライマックスをなすのは、小説の最終盤、空襲警報が鳴って勤務先の小林理学研究所に引き返す主人公が目撃する、以下の風景である。

空は夕焼けで、茜色に染っていた。人気がない島の中の道を、私と同じ年恰好の女学生が歩いて行くのが見え、私は彼女に追いつこう、と足を早めた。空襲になった時、一人よりも二人のほうが心強いと思ったのだ。／その時、彼女のズボンの裾から、何かが落ちた。彼女はそれに気づかぬように歩いて行く。／私は、落し物を教えてやろう、と思ひ小走りになった。近づいて見ると、それは屏風だたみにした新聞紙で、少し色の変ったかなりの量の血液が染みこんでいた。／私は、それを目にした瞬間、なぜともなく、もう駄目だ、と思った。月々のものの手当てをどうしているのか、祥子や靖子にも聞いたことはない。が、夕焼けの西日のもとに晒されている屏風だたみの新聞は、夜空からいつせいにシューシューと音を立てて落ちてくる焼夷弾ほどの恐怖を、私に与えたのだった。／私は、その場に立ち竦んだまま、背をかがめ加減に歩いて行く女学生の後姿を見つめていた。

タイトルの「茜色」の語が見えることから、この挿話の重要性は明らかである。「茜色の戦記」という表題は、茜色に染まる夕焼け空の下、空襲警報が鳴る中を歩いて行く女学生の後ろ姿を内包している。女学生の落とした使用済みの代替の生理用品、血の染みた新聞紙は、その「夕焼けの西日のもとに晒されて」主人公の眼下にあった。

場面の叙述はこれで終わり、この日の空襲を主人公がどう過ごしたのか、女学生に追いついて話をしたのか、その後のことは何も書かれていない。一行空きのあと、沖繩戦や広島・長崎への原爆投下、そして玉音放送と、敗戦までの国内外の出来事が日付とともに記されていく。つまり右の挿話は、敗戦直前の主人公の個人的な体験として配置されている。ここまで「戦争が終るといふことは、無論勝つということであるが」のように、主人公は戦局の悪化にもかかわらず勝利を信じていたが、女学生が落とした生理用品に「夜空からいつせいにシューシューと音を立てて落ちてくる焼夷弾ほどの恐怖」を感じ、「もう駄目だ、と思った」。これは物資の不足によって敗戦を察したのだと、一義的には解釈できる。

この場面で祥子と靖子という、女学校時代の同級生の名前が出て来ることに注意したい。本作は第一章で「私たちの府立高等女学校」の慣習の一つとして、毎月八日の大詔奉戴日の明治神宮への徒歩での参拝を挙げていた。

その折、列からはずれて鳥居の脇に立っている生徒が、いつも何人がいた。私がそれが何のためかわからず、祥子に聞くところ、／＼「あの人たちは、あれなのよ」／と、言った。／＼「あれっ

て、何」私は重ねて訊ねた。すると祥子は勘の悪い私を憐むように、／＼「あれって言えば、あれでしょうが」／と眉を寄せた。／＼「ああ、わかった。あれね！」靖子が、勢い込んで言い、顔を赤らめた。私は漸くその時になって思い当り、／＼「どうして、あれの人は参拝しないの」／と、また愚かな質問をして、祥子に蔑まれた。／＼「だって、けがれているからよ」／この時彼女が口にした、けがれている、という言葉は、その後長く私の胸の中に澱のように沈殿した。

月経は「あれ」という隠語で呼ばれ、タブーのように扱われている。この時点で初潮を迎えていない主人公と靖子は、「鳥居の傍に立っていれば、今そうです、と公表しているようなもの」なのに、と訝しむが、祥子は自分も「もしぶつかつたらそんな軀で参拝することは出来ないかもしれないわ」と生真面目に言う。この後、主人公は小説に流れる時間の中でどこかで初潮を迎え、毎月何らかの「手当て」をしていたのだろうが、そのさまは描かれない。だが明治神宮の挿話の「この時彼女が口にした、けがれている、という言葉は、その後長く私の胸の中に澱のように沈殿した」という一文の、「その後長く」の射程は小説の最後まで及んでいるだろう。さらに言えば、この穢れの意識は神社一般というより、明治神宮という天皇にまつわる場所ゆえだと解される。主人公が通う女学校では、毎月曜朝に昭憲皇太后の御歌の奉唱、始業前に明治天皇の御製の奉唱が行われ、養蚕の実習が重視され、作法の教師は「明治天皇に仕えた女官の娘で、明治天皇の御落胤であるとか、大正天皇と乳兄妹であるとか噂されていた」といい、明治神宮参拝もそれら女学校と天皇のつながりを示す挿話の一つのよ

うに読まれるからである。

空襲の場面で落ちた血の染みた生理用品は主人公のものではないが、前を歩くのは「私と同じ、年恰好の女学生」なのだから、他人事ではないはずだ。主人公が強い恐怖を感じ、「その場に立ち竦んだまま」去っていく彼女の「後姿を見つめていた」のは、女学生がもう一人の自分で、主人公にとってこの体験は自らの分身を見るようなことだったからではないか。

主人公に限定する必要はないだろう。この場面の後、東京の大空襲以降、消息がわからなかった靖子から手紙が届く。「ザーザー」と大雨の降るような落下の摩擦音を出して焼夷弾が落ちて来」る中を逃げ、「周辺は完全に火に包まれ、真赤に染った煙の切れ間から低空飛行のB29が見え、果しなく焼夷弾が降って来」たと記す靖子の手紙は、別の日の別の場所の出来事だが、書かれなかった先の空襲の場面の続きのようでもある。

小林信彦(三二年生まれ)は文庫の解説で、戦時中は小学生だった自分の学校の大詔奉戴日の慣習を振り返りつつ、「メンスの女生徒は参拜できなかつた、というのも凄い話である」と述べ、続けて「少女たちの思春期と戦争」を粘り強く描いてきた作品のハイライトにふさわしい」と空襲の場面を評している。強い印象を残すこの二つの月経の挿話は、祥子と靖子という名前によってつけられている。それによって生理用品を落とした女学生は、主人公であり靖子でありまた祥子や鳥居の脇に立っていた生徒たちでもあるという意味を与えられる。主人公たちはこの時点で既に女学校を卒業していて、生き残った者は終戦後の時間に進むが、後ろ姿の女学生は女学生のまま、戦時下の茜色の空の下にとどまる

のかもしれない。

あとがきによると、津村の出身の女学校は空襲で全焼している資料が残っていないという。動員先も同様で、「戦後四十八年を経た今、過去は着実に埋もれつつある。思い出を語ってくれた同級生たちの話もまちまちで、その人にとって強烈な記憶というものはおのおの異なることを改めて思った。それら大勢の人々の証言を主要人物に集約し、私は、私たちみんなの戦争を書いたつもりである」と作者は述べている。謝辞からは、高等女学校、勤労動員先の工場、専門学校、研究所がほぼ実名で記されていたことがわかる。一方で、主人公の名前は目立たず(藤岡育子という名前は作者の本名と一致も類似もしていない)、「私」という一人称が採用されている。「私」も靖子も祥子も、明治神宮の鳥居の傍に立っていた女学生たちも、名前を与えられていない後ろ姿の見知らぬ女学生も、同じ「私たち」なのだろう。

サイパン玉砕の報道の翌日、「私」は実践女学校の全校生徒が「明治神宮社殿に復讐の決意を誓い」、三年生は「四、五年生だけではなく、自分たちも軍需工場で働かせてほしい、という血書を学校に提出した」という新聞記事を靖子と祥子と見て、「自分たちの学校」以外に「激しい気持を抱えている女学生がいることに驚き、「もつとほかにも、愛国の血をたぎらせている人達がいるのかもしれない」と圧倒されていた。別の学校の、会ったこともない人たちだが、これもまた戦時下の女学生である。

『茜色の戦記』は、「私たち」女学生の戦記である。本作においてその「私たち」女学生をつなぐのが、血のモチーフである。血は文脈によって穢れにも愛国にもなり、作中でその意味は一つに

収斂しない。

二 『田辺聖子』私の大阪八景』おかあさん疲れたよ』

— 女は戦死しない

田辺聖子の最初期の作品の一つ、自伝的な短篇連作『私の大阪八景』は、六〇年代前半に同人誌に順次発表され（「のおと」とその改題誌『大阪文学』に六一・一二（発表）、書き下ろしの最終章（その五）を加えて単行本化された（六五・一一、文芸春秋社）。本作は「来年は女学校へはいらなければならぬ」という一文からはじまる（その二）。主人公のトキコが気に入る女学校の入学試験は、今年から筆記試験がなくなったが、それは「にっぽんはいま戦争しているのだから「…」大きくなったら男の子は兵隊にくくし、女の子は兵隊にいかなくてもよいので、どっちにしても、頭は少々わらくてもよいのだから、学力しけんはいらんらしい」ためだと説明される。続く章でトキコは女学校に入学し（その二）、繰り上げ卒業で女子専門学校に進学するが（その三）、工場労働に動員され敗戦を迎える（その四）。全体の中で女学校時代が占める割合は大きくないものの、入学前は試験の話題等によって、卒業後も繰り上げ卒業したトキコが自分より大人びた女性たちと働くさまが描かれることで、作中の時間感覚は一貫して女学校が基準になっている。

冒頭の「男の子は兵隊にいくし、女の子は兵隊にいかなくてもよい」という男女の対比は、作中で言葉を替えて繰り返されている。太平洋戦争開戦後、「男でない」と人間でないようにみんながいる。なぜかという、男でない」と兵隊になれないからだ。「…」戦

場でタマに当たって死ぬ、そういう一級品の美しい死に方でなければ値打ちがない。／トキコは女に生まれたことをはずかしく、いやらしく思っている。／女と男とは、えらいちがいだ。理科の分類式にかいてみるとこうなる」（その二）。本文では上段に男、下段に女と、対になるようにレイアウトされている。

男／一、兵隊になれる。／二、だから長生きしないのにきまっているから、凛々しくって颯爽としている。／「…」／四、あとを頼むぞ、とか何とかいつて戦地へゆくと、若い盛りにパッと桜のように散る。そしてほめられる。新聞にのる。勲章をもらう、みんな泣かれる、いい気なものだ。

女／一、兵隊になれない。／二、だから草むしりしたり工場へ行ったり、子供のハナをふいたり防空演習に出たりしなければならぬ。凛々しいところはちつともない。／「…」／四、あとへ残されてあと始末したり、苦労したりしなければならぬ。／そして白髪になる、腰がまがる、いいことはちつともない。

女学校の同級生は男に生まれて兵隊になるのは嫌だと言うが、トキコは「女に生まれて汚いよりはいいでしょう」と応酬する。戦時下の作品、たとえば川端康成の掌編小説『冬の曲』（『文芸』四五・四）にも、女学校を卒業した娘の視点で、戦死した婚約者らしい男性と対比して、女性である自らを汚いものと卑下する表現は見える（「女なんて下らないもの、汚ならしくて馬鹿なもの、いくら死んでも勿体なくない、男の人の前に立つて弾よけになれないものかと泣きながら、やはり悲しみにあまえてゐる」。注目したいのは、そのような男女の優劣を前提とした対比が、『大

阪八景』では月経の話題に接続していることである。

「たとえばアレのときやんか」とトキコは得意になって説明した。「うちら、女はアレのとき月一ぺんはナニクワヌ顔するでしょう。あのときいつも女はキタナイナア、とつくづく思うのよ」「…」。女が汚い理由は「アレ」月経（を隠すこと）を根拠に説明され、「そこへくると男は公明正大でしょう。それで天皇陛下パンザイでサーツと死ぬしね。何となくいさぎよく見て、くれがええでしょう」と、男は潔く戦死することを根拠に美しいとされる。もちろんここでトキコが言っていることは何重にもおかしい。

事の大小が揃っておらず、比較になっていない。つつこみどころ満載である。だが得意気に語られるこのむちゃくちゃな理屈も、「そいで」「サーツと」「何となく」「見て、くれがええ」のような戦死の美しさを語るには軽い口調も、戦時下の女学生の、その時点の視点を装う本作の方法と見るべきだろう。その通らない理屈によって、天皇のために戦死する美しい男性と月経のある汚い女性が対置され、戦死への憧れが論理的に導かれる。女学生のトキコは、「たとえ女ながらも日本人として、天皇陛下のためお国のため」死ぬ小説を書き続けてもいる。

田辺聖子は六三年、『大阪八景』と同時期の発表の『感傷旅行』（『航路』六三・八）で芥川賞を受賞した。現代の風俗を描くという意味では、その後の田辺は『大阪八景』ではなく『感傷旅行』の方向に進んだと言える。その田辺が戦時下の女学生を小説に書いたのは、九〇年代初め、新聞連載の長篇小説『おかあさん疲れたよ』（読売新聞）九一・三・二一〜九二・五・二四）においてである。田辺は「昭和が終わったとき、私は私の昭和史を書くことと

思った」、本作を「私は私の（昭和）に贈ったのだった」と述べている。

「音おんの通り昭和五年生れ」で「戦中派」を自称する主人公・昭吾は、昭和が終わった現在、六〇歳を超えている。工場動員の折の空襲で旧制中学の友人を亡くしている昭吾は、戦場や原爆ではないが内地の空襲も戦争だったのだという思いを、戦争の記憶が薄れていく戦後社会の中で抱いてきた。その思いを共有できるのが、工場動員で知り合った「空襲メイト」、当時高等女学校の女学生だったあぐりである（工場には挺身隊のお姉さまたちもいた）。昭吾は空襲を体験した大阪・京橋の慰霊祭であぐりと再会し、「戦死した学徒兵や、工場の空襲で死んだ動員学生の記念塔が建てられる」淡路島に行こうと誘われ、「もう昭和ではなくなつた。こんな時代に、戦争に斃れた学徒たちの記念塔を詣ってやるのは、同世代の人間しか、ないのではなからうか」と考える。あぐりは「昭和天皇もおかくれになつたし……」と続ける。あぐりは四つ上の兄が学徒出陣で戦死しており、そのため昭吾との結婚も拒んで家を支えて生きてきたという背景がある。

このように同世代で同じ空襲体験を持ち、戦死した若者への慰霊の思いを共有する二人だが、昭吾はあぐりの死の前後に、あぐりが独身女性の碑の会に入っていたことを知る。

今まで全く、気付かなかつたことを知らされた思いだった。／男の戦死者は哀悼されるが、その陰に、結婚すべき相手を失い、孤りで生きることを強いられた戦争犠牲者たちに、世間も男も（昭吾もその一人だが）気付かなかつたのだ。彼女らもいたわられ、なくさめられるべき被害者たちだったのに。

——男の眼からだけみてたら、世の中には見落しが多いなあ。／＼昭吾はしみじみ、そう思った。

本作は昭吾のパートと、世代の異なる彼の年下の妻のパートを交互に並べる構成で、あぐりを視点人物には設定していない。菅聡子は、「戦争独身女性」としてのあぐりの生は昭吾の視点からは語り得ないものとしてある。この肅然とした事実を前景化するために、昭吾の視点は機能している」と論じる。戦死した男性はそれでも哀悼される。見落されるのは、戦後を生きる女性である。「大阪八景」のトキコの図式で言えば、パツと美しく散る男性と、あと始末を引き受けて苦勞する女性という対比である。美化され顕彰されることのない女性の生を、「おかあさん疲れたよ」はあぐりの最期の言葉をタイトルに掲げながら、見落す側である男性の視点から間接的に描くのである。

あぐりが病死すると、昭吾は「戦友をうしなつた気がする」。「あぐりの野辺の送りはまた、昭吾にとって、／＼(昭和の、野辺の送りや——)という気分もあつた。「…」昭吾にとってはやはり、昭和はまだ終っていないのだ。「…」あぐりが死んで昭和も終わった気がする。あの戦争の思い出も空襲の記憶も、あぐりが持ち去ってしまった。……」。昭吾にとってあぐりの死は昭和の終わりを意味する。昭和の終わりは文字通りには天皇の死を意味するが、それを一人の女性の私的な死にずらししていると、言おうと思えば言えるかもしれない。

しかし仮に立場が逆だったら、あぐりは昭吾の死を昭和の終わりだと見なすだろうか。「大阪八景」の最終章のラストシーンで、トキコは戦後の天皇の巡幸に万歳を叫ぶ人々の中に、「ハイカ!

置いていかないで下さあいッ」と叫ぶ「むすうの、死者の声」を聞いていた(本文では「置いて」以下のフォントが大きくなっている)。死者は男性に限らないだろうが、東京の大学に通っていて練り上げ卒業で学徒出陣し魚雷が命中して戦死した徒兄を思い出す場面もあり、男性の戦死者の声をイメージするのが自然である。トキコはかつて「天皇陛下様 新太郎兄ちゃんだけは死なせないで下さい」と祈っていた。

小松左京(三一年生まれ)は七四年刊の『大阪八景』の文庫の解説で、「自分とは同世代の異性たち」のことを知らずに「自分たちの生きてきた『時代』というものを、「男の軌跡」だけで、わり切ってしまうのは、やはりひどい片手落ちのような気がします」、「お聖さんは、戦前戦中戦後の「少女の世界」について、はじめて率直に、「男にもわかるように」私に語ってくれた——私の知るかぎりでは——はじめての「作家」です」と感謝を述べている。田辺が「戦時中『軍国少女』だった自分」を「つきはなして客観化する作業」をした上で読者に説明している、というのだが、的確な評ながら、そうだとすると親切すぎる気もする。田辺もあぐりも、戦死しない女性が美化されないことを、啓蒙的に教えるのだから。独身女性の碑の会も淡路島の記念塔も実在する。六七年に丹下健三の設計で建てられた戦没学徒記念・若人の広場公園に、昭吾はあぐりの死後、一人で訪れ、中学の同級生の名前を見つける。「あぐりもまた、海や空や山に散ったと思う。昭吾の意識のなかでは、あぐりやはり戦没学徒の一人なのだった」。亡くなったあぐりは昭吾によつて戦没学徒とまとめられ、戦死者のように「散った」と形容されるが、この認識は戦後を生き病死したあぐりの生

とも死ともずれる。小説はあぐりとの交流を知って怒っていた妻が昭吾を追って淡路島に行こうと改心するところで閉じられる。田辺が設定する男女の対は、対称性を持たないのである。

三 河野多恵子『遠い夏』『みいら採り猟奇譚』

——女学生が戦死するために

河野多恵子の『遠い夏』（七七・一二、構想社）は、六〇年代前半に発表して別々の単行本に収録していた短篇、『塀の中』（『文学者』六二・一）、『遠い夏』（『文学界』六四・二）、『みち潮』（同六四・八）に、編集者から『みち潮』と『塀の中』の間の時期が欠けているから書くようにすすめられたという『時来たる』（『文芸展望』七七・一〇）を加えて連作にしたものである。主人公の名前などは異なるが（『みち潮』の主人公は名前がなく「少女」と呼ばれる）、四篇は作中の年代順に並べられ、『時来たる』では女学校五年生の主人公が繰り上げ卒業の下級生とともに挺身隊逃れの受験に臨み、『塀の中』の主人公は進学を選んだものの結局数ヶ月で挺身隊と同じ工場で労働することになり、『遠い夏』は終戦の翌日の学徒挺身隊の解散を描く。

作者はあとがきで「すべて私と同年の生まれ」の「女の子の戦争体験を素材にした」、「その世代の標準的女の子として彼女たちを書いた。当時のその子たちの正味の心情を書こうとした」と述べている。「戦争と少女」の題で帯に言葉を寄せた遠藤周作（二三年生まれ）は、自分の世代にも言及しつつ、「戦争の足音のなかで育った一人の少女、一人の娘の内面」を緻密に描いたと評している。なお、本書が刊行された七七年は、最も死者数の多い太平洋

戦争の最終年の死者の三十三回忌のタイミングに当たり、雑誌の特集や出版物、記念行事などが相次いでいた。

興味深いのは、「時来たる」を加えた、この四篇だけを纏めた本が出るようになってみると、私の気持は自分でも意外なくらい切実に嬉しいのである」と本書への思い入れを語る作者が、一方で「密かに書いている気持」で書き「密かな読まれ方を望んだ」と述べ、作家論で参照されるのも「密かに書いた気がし、密かに読んでもらいたかった私としては、どうも具合がわるかった」と、ひそかな作品であることを強調している点である。

四篇のうち最もはやい『塀の中』は同人誌『文学者』に発表された最初期の作品だが、実はこれ以前にも河野は同誌に戦争に材をとる短篇を発表している。その一篇の『こおろぎ部隊』（五四・七）の主人公は工場労働をする女子専門学校生で、「挺身隊逃れと、繰上卒業のための四年五年合併のその年の受験」の勉強を見てくれた兄の友人の死の報せを受けて彼の接吻を思い出す。『遠い夏』連作と明らかに共通の題材だが、同作は単行本にも全集にも収録されず、自筆年譜でも「習作」と呼ばれてタイトルすら挙げられていない。

このように最初期には自分と同年の生まれの少女の戦争体験を小説化していた河野だが、芥川賞候補の『雪』（『新潮』六二・五）、「美少女」（同六一・八）、同賞受賞作の『蟹』（『文学界』六三・六）と、評価された作品はいずれも現代を舞台にする。その後の創作は主にこの方向で行われた。その河野が正面から戦時下を舞台にする小説に取り組んだのが、九〇年、純文学書下ろし特別作品として刊行された『みいら採り猟奇譚』（九〇・一一、新潮

社)である。¹²⁾

本作は構想・執筆に十年かかっており、刊行が昭和の終わりのタイミンクになったのは偶然である。だが「反時代」的姿勢を問われた作者は、「戦争とか戦争中のことを書いた小説はこれまでもいろいろあつたし、昭和が終わった途端にいろんな出版物が出ていますね。[...]それはそれで結構なんです、なにか一つパターンがあるのね。いまから捉えている感じというのかしら、それに対する反時代もある」と返答している。本作は刊行直後から戦時下の生活のディテールの描写を高く評価され、野間文芸賞を受賞、河野の代表作の一つとなった。なお、野間文芸賞の選考委員は、「第三の新人」の遠藤周作・安岡章太郎・吉行淳之介、同世代の大庭みな子(三〇年生まれ)らである。

『みいら探り』は、「昭和十六年―一九四一年―新緑の季節、比奈子は尾高正隆と結婚した。彼女の思いもしなかった、変った結婚生活の始まりだった。／比奈子は先ごろ高等女学校を出たばかりの若さだった」と、作中の年代を示して主人公の奇妙な結婚生活のはじまりを叙述するところから開始される。以下、四年間の戦時下の結婚生活が描かれていくのだが、主人公の比奈子は冒頭の時点で既に高等女学校を卒業している。つまり作中の現在、主人公は女学生ではない。では、『みいら探り』を〈軍国の女学生〉小説とする根拠はどこにあるのか。

冒頭では主人公の若さを言うのに、年齢ではなく「高等女学校を出たばかり」と、女学校卒業が基準にされている。同様に、「比奈子が女学生になった昭和十一年」「比奈子が女学校の四年生だったその年の夏のこと」のような年代の示し方も随所で見られる。

また、見合いの場面で動員による工場労働が話題にされ、燈火管制用の布を染める際には女学校の家事の時間のことが、というように、現在の出来事もしばしば女学校の挿話を引き合いに出して語られる。後述の月経の挿話もその一つである。

特に重要なのは、女子挺身隊の通知の挿話である。実家の父から転送されてきた「相良姓の彼女宛の封書」の「差出人名は、比奈子が三年まえに卒業した高等女学校」であった。

拝啓 戦時下、卒業生各姉におかれては、この聖戦を勝ち抜くべく、身は銃後にあらうとも総力戦の一員として、日日有意義にお過ごしのことと存じます。／さて、[...]閣議における昨年九月の國內態勢強化方策の決定以来、一四―二五歳の未婚・無職・不就學者による女子挺身隊の動員が進んでをりました。この三月より強制的に組織化されることになりました。[...]本年より四學年終了者にも卒業資格が認められることになりましたところ、同學年生徒中には勤勞意欲に燃え卒業を撰ぶ者少からず、四、五學年生は卒業と同時に、ごく一部の進學者を除き本校同窓女子挺身隊として、所定の職場へ直ちに出勤するのであります。[...]昭和十九年三月一日

新字新仮名の小説の本文にあつて、通知の文面は旧字旧仮名表記である。校歌の一部を「(働く乙女に榮えあれ)〈戦ふ乙女に勝利あれ〉」と変えたという通知も同封されており、比奈子は「元の校歌のどこにも、〈乙女〉はなかった。母校の挺身隊員であれば、数え年二十五歳の人でも、乙女でいられるらしかった」と、「乙女」の範囲について考える。

実は比奈子は、実家の跡継ぎ探しが難航し、女学校卒業と結婚

から三年経ったこの時点でも戸籍上は未婚のままである。同封の回答用紙に未婚として返せば挺身隊として動員されるはずだが、通知は夫によって破り裂かれる。後日、父から封書の中身を問われた比奈子は、「今年の卒業生は工場へ出勤なんですって。そういう時代だから、これまでの卒業生も銃後の女性として母校の名を辱しめることのないようにと、ま、訓示ですわね」と誤魔化す。専門学校へ進学した女学校時代の同級生に問い合わせると、下級生は「通勤は一年生だけ。例年の五倍の競争率の試験を受けて入ってきた人たちですが、結局工場通ひ」だと知る。

ここで下級生のこととして語られる内容は、作者や作者と同年の生まれの女学校出身の女性たちが体験したことである。『遠い夏』連作では主人公の少女を「すべて私と同年の生まれ」に設定していた作者は、『みいら採り』では結婚生活を描くためか、主人公を自分の三つ上に設定している。一方で、比奈子は戸籍上は未婚で、繰り上げ卒業の影響で受験倍率の上がった作者の代の下級生たちとともに、「乙女」の一人として女学校が組織する女子挺身隊の中に入るべき者とされている。こうしたいくつかのやや強引な操作によって、小説の開始時点で女学校を卒業している本作の主人公は、にもかかわらず、なお女学生として語られているのだと考えられる。『みいら採り』は、結婚生活を送る戦時下の女学生を主人公に設定する、変格的な〈軍国の女学生〉小説なのである。以下、この設定を踏まえて、本作のラストシーン、新婚初夜からの促しによってマゾヒストの夫の要望に応えるようになっていった主人公が、殺してほしいという夫の望みを叶える場面を読み解こう。四つ匍いになった夫に「お乗りください」と促された比奈

子が跨ると、夫は「四本脚」で歩きはじめた。次に浴衣の上部を脱いで同じ姿勢になったとき、比奈子は両袖を背中に生えた翼に見立てて、馬ならぬペガサスだと名指す。「ペガサスならば天翔けなければならぬと、彼女は言った。／＼あそこから、翔んで頂戴。わたしを乗せたまま。真っ直ぐにここから走って行って……」。縁側の手摺りに「彼の前脚」がかかり、背中の彼女は夜空へ掲げられた。同じ行為を繰り返すと、「彼女はいつそう高くと夜空の人になった」。その後、下穿きひとつになった夫の首に縄をかけて跨り、立ち乗りの姿勢になって手綱を引くと、比奈子は襖を開けて電燈の紐に手を伸ばす。「すっかり縁側を明け放つてあるこの部屋に燈りを点けるのは、もとより狼火をあげるようなものだ。彼女は何かに向い、「おゆるしく下さい。ほんの十秒」と念じて紐を引いた」。小説はこれで終わるが、次の瞬間、死んだ夫と比奈子のいる部屋は、燈火管制下の夜の中、煌々と照らされるはずだ。

佐伯彰一（二二年生まれ）は同時代評でこの夫の死について、「いかにも私的、プライベートな死のかたち、戦時下におけるイバシーの極限ともいべきだろう。外なる世界では、戦場で、また空襲下の町々での、ほとんど日ごと週ごとの龐大な死者たち——彼らは、まきれもなく公的な死者であったが、彼らをいわば向う側にすえ置いたまま、河野さんは、ひそやかに、しかし恐れげもなく、純粹に私的な、みずからの性的嗜好に殉じた男性、いわばエロスの殉教者の姿を対置して見せる」と評し、「じつの所ほくなど戦中派の世代にとって、こうした設定のいわば真向からの反時代性、その大胆不敵さは、胸にこたえる」と、自らの世代に触れつつ強い反応を示した¹⁵。佐伯の議論では、自身の性的嗜好に殉

じて死んだ夫は、戦場や空襲下での「公的な死者」に対する「私的な」死者として位置付けられる。

全三章からなる『みいら採り』の短い最終章で、夫婦は空襲の激化した東京を離れ、貝波の別荘に移り住んでいた。架空の地名であるその場所は、「ここで火を出したら、狼火^{のろし}をあげているようなもの」と説明され、岬では石垣を「敵艦に見立てて、攻撃訓練を行っている」飛行機が「両翼の日の丸を見せ、かわいらしい唸りをあげて、斜めに原生林へ突っ込みながら消え去る」のが見える。「魚雷艇が待機し、発進してゆくための横穴」も掘られはじめているようで、やがて「岬の上で、よく次々に急降下して往つた、翼に日の丸をつけた飛行機」は姿を見なくなる。「ラースト・ナイト」を思つて部屋の障子と雨戸を開け放つと、「夜気の快さは、そこが夜空と海上へ繋がっている証に外ならない」。この念入りな舞台設定を踏まえると、ペガサスとなって天翔ける夫は、飛行機や魚雷艇で空や海に発進する特攻隊員に重なる。特攻隊員と夫は同じ戦時下の死として重なるような形象を与えられつつ、強制された公的な死と自ら望んだ私的な死として対置されていると、言えれば言えそうである。

だが特攻隊員と重なるにしては、冒頭の時点で三十八歳という夫の年齢が不自然である。夫は性癖のために背中^{せなか}に痕があり、ガスの使用が制限されても銭湯に通うわけにいかず水風呂を浴びていたが、比奈子は「もちろん、戦勝祈願でしょう。もう戦地へ行かせていただけそうにはない年齢になっちゃったものだから、せめてね……」と使用人に説明する。これは「適当にあしらっているだけ」の発言だが、夫の年齢には戦地に行くことができないと

いう意味が与えられている。夫は特攻隊になり得る、たとえば同級生がそのように戦死する世代ではないのだ。

さらに言えば、ペガサスが飛行機と重なるのなら、それに乗って何度も夜空に高く飛ぶのは比奈子である。殺してほしいというのは夫の望みだが、浴衣の両袖を翼に見立てて、夫をペガサスと呼ぶのは比奈子の創意である。遡ると初夜の後、比奈子は「女学校生活の最後の学期」に流行ったサイン帳の「余白」を用い、夫婦生活の記録をつけようとしていた。

比奈子の出た女学校では生徒たちの間で、何故か生理のことをおばさんと言っていた。ほかに随分思いきった言い方があつて、誰もが明らかにそれを知っていたが、使う人はまずいなかった。その学校の生徒がそういう言い方をしてることが知られば、国家への忠誠が課せられている、この戦時下、剣を帯びた人たちが校門から入って来そうである。そういう不安な想像をさせる言い方なので、まずそのための遠慮があつたのだろう。「……」比奈子の記録帳に第六夜が記されたあと、彼女は結婚して十七日目に新生活で初めてのおばさんを迎えた。予定通りであつた。

夫婦生活は女学校時代の手帳の余白に記入するという形で女学校の続きとして意味付けられ、女学校一年生からはじまつたという月経の記録もそこに併記される。性交と月経を同じ手帳に記録するのは、妊娠に関連するという点では理にかなっているように思われるが、結婚一年後、「女学校を卒業するときに友だちと書き合つたサイン帳の白い頁」（と念押しするように同じ説明が繰り返される）に記入されていた二つの記録は、ともに中止される。性

交のほうは夫の「性癖のもとでは」「記録すべきかどうか決めかねる夜が混じるようになった」ためで、月経のほうは別の理由がつけられているが、つまりこれは妊娠につながる行為が夫婦の性生活のベースとなったことを暗示しているだろう。結末の場でも、夫は浴衣は脱ぐが下穿きだけは最後まで身に着けている。

比奈子は女学校での隠語で月経を呼ぶが、それは「随分思いきつた言い方」を避けるための語であった。「国家への忠誠が課せられている、この戦時下」に「この学校の生徒」がそれを口にしたら「剣を帯びた人たち」が校門から入って来そうだと説明から、ここで避けられている呼称は、日の丸だと推定される。月経を日の丸と呼ぶことは、個人ではなくなぜか女学校の問題と見なされている。挺身隊の挿話で比奈子が「わたしは母校の名を辱しめるかも知りませんもの」と考える場面でも、「銃後の女性」にふさわしくないことをすることは個人や家ではなく女学校の汚点になると想定されていた。戦時下における不敬な行為は、誰かによって行われたとしたら、女学校の一員として、すなわち女学生として行われたという意味になるようだ。

女学生たちが不敬な表現として避けていたその語は、小説の本文においても伏せられている。伏せられていた日の丸は、別の文脈で、離れた箇所です浮上する。それが先に引いた特攻隊の訓練をする飛行機の翼を説明する箇所である。結末の場面で、夫の背中に乗った比奈子は、浴衣の袖を翼に見立てて彼をペガサスに変身させる。最後は浴衣も脱いでいるから、翼は純粹に想像上のものである。女学生たちの間で月経を意味していた日の丸は、岬から飛んでは落ちていった特攻隊の飛行機の翼を経由して、ペガサス

となった夫の背中に生えた想像上の翼に転写されるのである。

河野は単行本『遠い夏』と同年、『鉄の魚』(『文学界』七七・一)という奇妙な小説を発表している。魚雷艇で出征し海底で「飛び散り」「砕け散つて」死んだ前夫を、戦死者を祀る場所(靖国神社と思われる)にある建物内に展示された魚雷艇の中に入って追体験する妻を、彼女を残して閉館時刻で建物を出てきた友人らしい「私」が想像して語るという短篇である。タイトルの「鉄の魚」は魚雷艇を指す。妻は「征くまえの男」らしくいつも急いでいた夫の「何々してもらいたい」という口癖を反芻するように、「もう一度、陽の輝きを見せてもらいたい」「…」と、思わなかったであろうか」と鉄の魚の腹の中で夫に問いかける。夫の口癖は「こういうことはしないでお願いしてもらいたい」などと妻に命じるときに用いられていたものだが、同じフレーズは、言えなかった彼自身の望みを言うための言葉にすらされている。そして深い海底のような閉ざされた建物の闇の底で、妻は「自分がもう一度陽の輝きを見ることができれば」と、夫が望んだかもしれないことを自身の望みとして思うのである。

この『鉄の魚』を補助線にすると、『みいら採り』の結末は、飛行機や魚雷艇で出征した戦死者たちと夫を重ねるといふより、そこに乗る妻、すなわち戦死する夫と一体化する妻の体験を語っていると読み解くことができる。作者は少々強引な操作によって、戦時下で結婚生活を送る女学生が、夫と一体化して戦死する物語を書いたと考えられる。もちろん作中ではそのような出来事は起きていない。だが結末の場面で、比奈子は唐突に「女学校二年生、昭和十二年の夏休み」に見た古い万燈籠に掘られた「武運長久」

の字を思い出してもいた。倒錯は、夫の性癖のもとで行われる夫婦の性生活にあるのではない。なるほど作中ではそのような行為が行われ、小説はそれを細やかに描き続けている。だがそれは表面向きで、それを隠れ蓑のようにしてたどりつかれてるのは、夫に便乗して戦死する女学生の妻の享樂なのではないか。

『みいら探り』は、戦時下のハイティーンを描く小説としては例外的に敗戦まで行きつかない。夫を死なせることを、比奈子は「自分の半ばはこの人と一緒に向うへ行くのだ」と考えていた。主人公は死んではいないが、戦後の生が書かれないう意味では、戦時下でその生を半ば終えたようでもある。本作では、女学生の戦死が疑似的に、かつひそかに実現されている。月経の血の日の丸の翼が、そのための女学生の飛翔をかなえる。

おわりに——「第三の新人」再考に向けて

高橋英夫（三〇年生まれ）は『みいら探り』の結末について、特攻隊員と夫、戦場で男性を失った女性と主人公を重ねた上で、議論を戦後に延長している。

戦争末期、何ものかに捕われたことよって南海の空を飛び、散っていったのが特攻機であったが、ペガサス・正隆の死の状況は、戦争と全く無縁であろうとした囲われた空間において、なおかつ当時の特攻隊員の最後と相似であるように思われる。戦前まで生きてアメリカの「捕虜」にならなくても、男は捕われた存在であったということ、この相似は暗示していよう。／女はどうだったのか。男たちを戦場で死なせた悲しみと悔いを抱いた現実の女たちは、比奈子と正反対の位

相にあるように見える。しかしめぐぐぐに對極的であることは、かえって對極の通底を予想させもする筈で、女たちもたしかに戦争に悲しみよってかかわったのである。「…」そうであれば、囲われた空間の中で比奈子が正隆と一体化したのと、現実の日本人とは裏返しに重なっている。¹⁶⁾

前節で述べた通り、「戦中派」の世代の評者が読み込んだように夫自体を特攻隊員と重ねることには、無理があると思われる。しかし捕虜というメタファーは、河野が七〇年代のエッセイで、「自覚のありなしにかかわらず、私は戦後の三十年の男性たちの心の底では、捕虜意識が囁き続けていたような気がする」、¹⁷⁾「戦後の男性作家たちの仕事は、どこまでも彼等の捕虜意識と無縁ではないように、私には思われる。『…』評論家たちも、そんなのである」と述べていることも符合し興味深い。

この認識が妥当かどうかは措くとして、六〇年代以降の「第三の新人」の現代の夫婦や家族、男女関係を題材にする小説に、河野のこの視点を投げかけてみたい気はする。それは〈軍國の女学生〉小説から、逆に「第三の新人」の小説を照射するとうなるか、という視点でもある。評論の言葉で語られなかったとしても、同じ世代の男性作家たちの小説を彼女たちも読んでいたはずである。八七年、河野多恵子は大庭みな子とともに女性として最初の芥川賞選考委員に、同じく田辺聖子も平石弓枝（三二年生まれ）とともに直木賞の選考委員になった。各種の文学賞の選評に女性作家による評が入るようになったのは昭和の終わり、本稿で論じた作家たちがその最初の世代であった。

河野は先のエッセイで、「纏こそ打たれなかったが、敗戦になっ

た時、日本の男性はすべて捕虜になったはずである。が、女性に捕虜にはされなかった。人間とは見られていないから、捕虜にしてはもらえなかつたのである」とも述べている。この屈託、捕虜にはならないほうが、戦死もしないほうがいいはずだが、それを憧れ望む位置に自らを置くこの屈託こそ、戦時下を女学生として過ごした、女性の「戦中派」の真髓だと思われる。

女学生にとって戦争が何であったか、その体験の言語化は遅れた。だがそのタイムラグゆえに、一連の《軍国の女学生》小説は個人の過去の体験を超えて、ある世代のその後の生をも組み込む作品となった。《軍国の女学生》小説は、それが登場するまでの長い時間を含めて、男性作家と評論家の戦後文学史に対して位置を得るべきものである。

注

(1) 宮原昭夫「解説」(『れくいえむ』七五・七、文春文庫)。宮原は「れくいえむ」の前身の芥川賞受賞者で、三三年生まれ。名前に「昭」の字が入っている。

(2) 奥野健男「解説」(『戦時下のハイティーン』六五・五、集英社)。奥野は「解説者のぼくは敗戦の時、十九歳になったばかりのハイティーンであったので、ぼくの世代の自己主張、自己告白、自己批判として、他人ごとでない親近感と情熱を持ってこの巻の編集にあたった」と述べる。同巻には河野『扉の中』や吉行『焰の中』が収録されている。

(3) 「第三の新人」の主要メンバーに女性はいないが、デビュー期や交友関係が近い作家に、三浦朱門(二六年生まれ)の妻で聖心女子大卒の曾野綾子(三二年生まれ、敗戦時は金沢第二高女在籍)、

東京女子大出身の有吉佐和子(同、府立第五高女)がいる。

(4) 選評は「文芸春秋」七三・三より。委員は他に中村光夫・永井龍男・瀧井孝作・大岡昇平・舟橋聖一・丹羽文雄・井上靖で、いずれも年長である。安岡は「弱点をかぞえ上げればキリもない」、「いかにもマズい」、「初歩的な誤りともいえるような欠陥がいくらかもある」と言い、「余計なことをいうようだが」[...]「職業作家として立って行けるかどうかときかれれば、首をかしげざるを得ない」と、読み巧者らしい評を与えている。

(5) 月経の呼称や生理用品の歴史については、『わたちのリズム 月経・からだからのメッセージ』(八二・三、現代書館)→八八・四、講談社文庫・川村邦光『オトメの身体―女の近代とセクシュアリティ』(九四・五、紀伊國屋書店)・田中ひかる『生理用品の社会史』(二〇二二・八、ミネルヴァ書房)→二〇一九・二、角川ソフィア文庫)等を参照した。『わたちのリズム』には、「日の丸」なんて言って、よくおこられなかったと思うけどね(笑)」と昭和初めを回想する発言もある。

(6) 小林信彦「解説」(『茜色の戦記』九六・八、新潮文庫)。小林には「一少年の見た(聖戦)」(九五・五、筑摩書房)等の著作がある。

(7) 佐藤泉は「叙述の視点を戦時下女学生に設定し、バカだった、騙されていたという戦後の視点をそこに重ねることはない。が、全く同時に文体レベルで喜劇を選ぶことによって、見えない戦後、その省察の時間性を刻印している」と本作を分析する(『旧女学生戦中派 二重の残りの』「ユリイカ」二〇一〇・七、特集「田辺聖子」)。

(8) 田辺聖子『楽天少女 通ります』(九八・四、日本経済新聞社)。田辺にとって『おかあさん疲れたよ』は、安岡章太郎が昭和の終

わりを見据えて取り組んだ自伝的な作品『僕の昭和史』（「本」八〇・五・八八・五）に対応すると思われる。拙稿「安岡章太郎『僕の昭和史』と終わらない。戦後」（『都留文科大研究紀要』二〇〇九・三）参照。

- (9) 菅聡子「田辺聖子主要作品―読書案内」（『ユリイカ』二〇一〇・七）。菅は「初期作品『私の大阪八景』や自伝的作品群を通じて提示された〈昭和〉への批評的視線は、長篇『おかあさん疲れたよ』に収斂している」、〈昭和の終焉とともに筆を起こした『おかあさん疲れたよ』は、田辺文学における戦争と昭和というテーマの集大成と言ってよい」と本作を位置付けている。本稿はこれに示唆を受けている。

- (10) 小松左京「解説」（『私の大阪八景』七四・一一↓二〇一七・八、角川文庫）。

- (11) 同誌掲載の「習作」の一つ、『南天の羽織』（五三・五）は広島で被爆した伯母を引き取る話で、主人公自身の説明はない。この後、雑誌の一時休刊や病気療養で作品発表の間隔が空く。

- (12) 河野は同シリーズで長篇小説『回転扉』（七〇・一一）を刊行している。夫の促しによる夫婦の特異な性生活が、結末の場面で主人公が自ら選択する行為に行き着くという点で、これは『みいら採り』と同型である。拙稿「夫婦という関係、夫婦とは別の関係―河野多恵子『草いさぎれ』『回転扉』論」（『昭和文学研究』二〇一三・三）参照。

- (13) 河野多恵子・川村湊「『みいら採り』をめぐって」（『文学界』九一・三三）。

- (14) この年齢設定について、吉行淳之介との対談「『みいら採り』をめぐって」（『波』九〇・一一）等で、作者は何度も質問されている。

- (15) 佐伯彰「エロスの至福の殉教者―『みいら採り』をめぐって」（『新潮』九一・二）。評論家として河野に伴走した川村二郎（二八年生まれ）は『みいら採り』について、「河野氏より学齢で一年下となるこちらにも、中学生高校生として類似の経験を味わされていた」と述べている（『快樂の永遠性―河野多恵子小論』『河野多恵子全集』第一〇巻、九五・一〇、新潮社）。

- (16) 高橋英夫「開かれた空間の構図 河野多恵子『みいら採り』をめぐって」（『群像』九一・二）。

- (17) 河野多恵子「自戒」（『文芸』七四・七）。後に引用した箇所は傍点は引用者による。

- (18) 佐藤泉は田辺聖子論で「女性戦中派」、「旧女学生戦中派」という呼称を用い、「残りものたる戦中派をさらにそのただなかで分割する特異な戦中派」と、「戦中派」の中の女性の位置を指摘している（『旧女学生戦中派』前掲）。

〔付記〕本稿では各作品に従い、元号と西暦を併用した。本文の引用は各文庫版に拠った。改行は／、中略は「…」で示し、ルビは適宜省略した。河野の名前の表記は、時期や文献によって異なるが、多恵子に揃えた。

（なかむら ともえ／静岡大学准教授）